硯と殿様

薄田泣菫

犬養木堂の硯の話は、あの人の外交談や政治談よりはずつと有益だ。その硯については面白い話がある。硯の徳川の末期に鶴笑道人といふ印刻家があつた。その一つに蓋に善いのを沢山持ち合せてゐたが、その一つに蓋に大雅堂の筆で「天然研」と書いたのがあつた。阿波の殿様がそれを見て、自分の秘蔵の研七枚までも出すから、取り替ては呉れまいかとの談話があつたが、鶴笑はなか〳〵諾とは言はなかつた。

呉れぬ物が猶ほ欲しくなるのは、殿様や子供の持つて生れた性分で、阿波の殿様は、望みとあらば何でも呉れてやらうから、達て「天然研」を譲つて貰ひたい

と執念く持ちかけて来た。鶴笑は一寸顔を顰めた。
「ぢや仕方が無い、阿波の国半分だけ戴く事にしませう。」
と切り出した。鶴笑の積りではそれでも大分見切つた上の申出らしかつた。何故といつて阿波の国は半分割いた処で、別段差支もなかつたが、硯だけは半分に割つては何うする事も出来なかつた。あの内閣や政党を毀す事の大好きな木堂ですら「鋒」とやらを見るためには、硝酸銀で硯を焼かなければならぬ、そんな勿体ない事が出来るものぢやないといつてゐる位だから。
だが勘定高い殿様はそれを聞くと、

「仕方がない、この硯と鳴門の瀬戸は俺(わし)の力にも及ばぬものと見えるて。」

と、溜息を吐(つ)いてあきらめた。殿様がこの場合鳴門の瀬戸を思ひ出したのは賢い方法で、人間(ひと)の力で自由にならないものは沢山(どっさり)あるのだから、その中からどんな物を引合ひに出さうと自分の勝手である。かうして絶念(あきらめ)がつけばそんな廉価な事は無い筈だ。

底本：「日本の名随筆　別巻9　骨董」作品社
1991（平成3）年11月25日第1刷発行
1999（平成11）年8月25日第6刷発行
底本の親本：「完本　茶話　上巻」冨山房
1983（昭和58）年11月発行
※底本の親本で「大雅堂（たいがどう）」に付けられた編注「〔池（いけの）大雅〕」は、削除しました。
入力：門田裕志
校正：高柳典子
2005年5月4日作成
青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。